

主 題：主からの祝福を忘れない

聖書箇所：コリント人への手紙第一 1章1-2 a節

コリント人への手紙第一1章をお開きください。

きょうから私たちはこのコリント人への手紙を学んでいきます。この学びに当たって、まず私たちはコリントという町について、教会について知らなければならないことがあります。そこで最初に、コリントの町がどんな町だったのか、どんな問題があったのか、どういう歴史があったのかを見ていきます。そしてパウロがこの教会とどのように関わっていったのか、どのようにしてこの手紙が記されていったのかを知った上で、パウロが語りたかった大切なことに目を向けていきたいと思えます。

A. コリント人への手紙の背景

1. コリントの町

1) 地理的に見たコリント

この教会が存在したコリントという町は大変繁栄した町でした。現在のギリシャの首都アテネから大体南西に78キロぐらい行ったところにあります。ギリシャ本島とペロポネソス半島をつないでいる地峡にある町です。地峡と呼ばれているのは、西のコリント湾と東のサロニカ湾に挟まれた幅が約6キロしかない、細長い首状の土地だからです。もともと古代ギリシャではコリントの地のことをイストモスと呼んでいました。これは古代ギリシャ語では首を意味したのです。ですからギリシャの北部と南部を結ぶすべての道がコリントの町を通っていました。また海路においても、これは小型船に限るのですが、東のサロニカ湾に入った船はぐるっと半島を回るのではなくて、コリントの町をローラーに乗せて反対のコリント湾まで運んだと言われています。もしこの半島をぐるっと回ると320キロぐらいあったと言われます。しかもこの半島を航海するのは大変危険が伴っていたのです。こうして多くの人たちがコリントの町を通り抜けていったという地理的な利点もあって、古代世界においてコリントという町は商業や貿易の中心地のひとつでした。ですから当然ここには古代世界の贅沢品が集まり、文明世界のあらゆる国民がコリントの町に集まって来ていたのです。

2) コリントの抱える問題

ただ同時に、コリントの町は大変堕落した町、不道德な町として人々に知られていました。コリンティア・ゼスタイ——コリント人のように放蕩の中に生活するという意味のギリシャ語ができたぐらいです。また、このコリントというは堕落の同義語として使われていました。ギリシャの哲学者プラトンは売春婦たちに言及する時にはコリントの少女という表現を用いたとも言われています。

しかもこの町には、アフロディテという愛と美の女神を祭る大神殿がありました。この女神はローマ神話のビーナスと同じ人物だと言われています。この神殿には千人の巫女たちがいました。この千人は女神に捧げられた売春婦たちで、夜ごとにコリントの町で商売をしていた。今もその遺跡が残っていますが、どんな町だったのか想像がつかず。その中でこういった不道德が行われていたのです。そしてコリントの人々は非常にプライドが高く、それでいて知性の高い者たちであったとも言われています。確かに貿易等で栄えた町でした。しかし、それでいて道徳的には大変乱れた、汚れた町だったのです。

3) コリントの歴史

このコリントという町は、紀元前146年にローマによって滅んでいきます。ローマ将軍のルキウス・ムンニウスは可能な限りこの町を破壊したと記録には残っています。そしてそのちょうど100年後の紀元前46年にあるひとりの人物がこの町を立て直すのです。その人物はガイウス・ユリウス・カエサルでした。これはラテン語ですが、この英語読みはジュリアス・シーザーです。コリントの町は彼によってローマの植民地として再建されました。そしてコリントはローマ帝国アカヤ州——現在のギリシャの南部をそのように呼ぶのですが、その州都、中心の町になります。再建されたコリントはかつてと同じように国際都市として、また重要都市として繁栄を迎えました。

2. コリントへの最初の訪問

パウロたちの時代、この町には約70万人の人が住んでいたと言われています。かなり大きな町ですが、その70万人の3分の2は奴隷たちでした。こういう町でパウロたちがキリストの宣教をなしたのです。

さて、パウロがこのコリントの町を訪問したのは第2次宣教旅行の時でした。パウロはテモテとシラスを伴っていました。彼らが今のトルコをずっと北上してトロアスという町に来た時、ヨーロッパの方に来てくれという召しに応じ、パウロのヨーロッパ宣教が始まります。ところが、このマケドニア（現在のギリシャ）地方に移ったパウロたちを待っていたのはユダヤ人たちからの迫害でした。使徒17章に

その話が出てきます。しかし、そんな中でもピリピの町で、テサロニケの町で、そしてベレヤの町においても救いにあずかる人々を神様は興されたのです。そこで、パウロはテモテとシラスをベレヤに残し、ぜひ早く私のところに来てほしいという願いを残してひとりでアテネへと向かったのです。アテネに着いたパウロは人々に伝道するのです。そしてしばらくしてテモテとシラスと合流します。やっと自分のもとにこのふたりが戻ってきたのです。その後パウロはいま一度このふたりをマケドニア地方、恐らくテモテをテサロニケの教会に、シラスをピリピ教会へと送り返すのです。そしてその後アテネの町で同じようにユダヤ人たちからの迫害を受けたパウロはさらに南下を続けてコリントの町にやって来のです。恐らく紀元51年ごろではなかったかと言われています。

1) コリントでの暮らし

さて、これからの出来事はただ話を聞くだけではなくて、実際にみことばを見ていただきたいと思えますので、使徒18章を開いて目で追いながら何が起こったのかをしっかりとご自分のうちに刻んでいただければと思います。

パウロは第2次宣教旅行の時にこのコリントの町にやって来ました。使徒18:1を見ると「その後、パウロはアテネを去って、コリントへ行った。」とあります。これがパウロがコリントの町を最初に訪問した機会です。そこでパウロはアクラとプリスキラというクリスチャンのカップルに出会います。2節に「クラウデオ帝が、すべてのユダヤ人をローマから退去させるように命令したため、近ごろイタリアから来ていたのである。」と記されています。この命令が出たのが恐らく紀元49年ごろです。そのころこのふたりはローマを出てこのコリントの町に移ってきたと書かれています。このふたりは「天幕作り」というパウロと同じ職業を持つ者たちでした。3節「自分も同業者であったので、その家に住んでいっしょに仕事をした。彼らの職業は天幕作りであった。」と記されています。ですから、パウロもこのふたりもその仕事をしていたので、パウロはこのふたりの家に滞在し、この働きをしながら、この町においての伝道を始めたのです。4節に「パウロは安息日ごとに会堂で論じ、ユダヤ人とギリシヤ人を承服させようとした。」と記されています。

◎ テモテとシラスからの良い知らせ：テサロニケ人への手紙

このような働きをしていたパウロのもとに、テモテとシラスが戻って来ます。5節「そして、シラスとテモテがマケドニアから下って来ると」と書いてあります。待っていたこのふたりがすばらしい知らせを持って帰ってきました。テサロニケの教会のクリスチャンたちがさまざまな迫害の中、信仰に立って歩み続けていることをこの時パウロは知らされます。またピリピ教会からの贈り物を彼は受け取るのです。パウロにとっては大変大きな励ましでした。その時の様子が1テサロニケ1章から書かれています。1節に「パウロ、シルワノ（これはシラスのことです）、テモテから、」と、この3人からの挨拶が記されています。「父なる神および主イエス・キリストにあるテサロニケ人の教会へ。恵みと平安があなたがたの上にありますように。」と。そして6-7節「あなたがたも、多くの苦難の中で、聖霊による喜びをもってみことばを受け入れ、私たちと主にならう者になりました。こうして、あなたがたは、マケドニアとアカヤとのすべての信者の模範になったのです。」とあります。なぜパウロがこんなことを記したかということ、これがパウロが聞いたニュースだったからです。多分彼らも迫害を受けていた。でもその迫害の中であって彼らはひるむことなく主に従い続け、主を愛して主のみことばに従い続けていたと、テモテからテサロニケ教会の現状を聞いた時、パウロは大変大きな喜びを感じたのです。

またもう1カ所、2テサロニケ1:1を見てください。お気づきになるように、「パウロ、シルワノ、テモテから、私たちの父なる神および主イエス・キリストにあるテサロニケ人の教会へ。」と同じあいさつがあります。3-4節「兄弟たち。あなたがたのことについて、私たちはいつも神に感謝しなければなりません。そうするのが当然なのです。なぜならあなたがたの信仰が目に見えて成長し、あなたがたすべての間で、ひとりひとりに相互の愛が増し加わっているからです。それゆえ私たちは、神の諸教会の間で、あなたがたがすべての迫害と患難とに耐えながらその従順と信仰とを保っていることを、誇りとしています。」。パウロはコリントの町で一生懸命福音宣教をしていました。そこにテモテとシラスが戻ってきて、テサロニケ教会の話をするのです。そしてピリピ教会からパウロへの贈り物を持って来るのです。それを聞き、また受けたパウロは、このテサロニケの教会の人々に感謝を記すのです。それがテサロニケ第一の手紙であり、テサロニケ第二の手紙です。この手紙はコリントの教会から記されています。こういったいきさつがあってパウロはテサロニケの人々に対してあなたたちが信仰に立って歩んでいてくれるのを私は大いに喜ぶと、そのメッセージを書き送ったのです。

2) 異邦人宣教

もう一度使徒の働きに戻ると、このふたりがマケドニアから戻ってきた話がありました。その後「パウロはみことばを教えることに専念し、イエスがキリストであることを、ユダヤ人たちにはっきりと宣言した。」と5節に記されています。この後パウロはこの福音宣教に専念するのです。しかし、この町のユ

ダヤ人たちは、6節に「彼らが反抗して暴言を吐いたので」とあるように頑なだったのです。パウロが何度主イエス・キリストの救いを語っても彼らは神のみことばを受け入れようとはしませんでした。そこで「パウロは着物を振り払って、『あなたがたの血は、あなたがたの頭上にふりかけられ。私には責任がない。今から私は異邦人のほうに行く。』と言った。」、神に対して、救いに対して余りにも頑なな彼らに対して、パウロは、あなたたちにこの真理を語り続けてきた、もう私の責任は果たした、これから私は異邦人の方に出て行くと。

そしてその後、7節「そして、そこを去って、神を敬うテテオ・ユストという人の家に行った。その家は会堂の隣であった。」とあります。今度はそこにパウロは宿を設けます。8節に「会堂管理者クリスポは、一家をあげて主を信じた。また、多くのコリント人も聞いて信じ、バプテスマを受けた。」と書かれています。確かにユダヤ人たちは多くの者たちが心を閉ざしたのに、神はその町にあって多くの人々を救いへと導いてくださった。しかも9-10節「ある夜、主は幻によってパウロに、『恐れなさい、語り続けなさい。黙ってはいけない。わたしがあなたとともにいるのだ。だれもあなたを襲って、危害を加える者はない。この町には、わたしの民がたくさんいるから。』と言われた。」、こんな励ましのメッセージを神はパウロに与えます。パウロよ、この町には私が選んだ者たちがたくさんいる、語り続けなさいと。その結果、パウロは18カ月、1年半このコリントの町にとどまってみことばを語り続けるのです。

恐らく皆さんも福音宣教をされていて、全く結果が出てこない。多くの人々にこの救いにあずかってもらいたいと我々がどんなに強く願っていても、そのような結果が伴わないと失望しがちですが、我々が覚えておかなければいけないのは、救いに導かれるのは神です。あなたがどんなに巧みに語ってもあなたは人を救いに導くことはできない。この町にはそういう人がたくさんいるのだと、このみことばが教えてくれるように、神ご自身が選ばれた人たちを神はお救いになるのです。私たちはそういう人たちがどこにいるのかわかりません。だから、私たちは福音を語り続けていくのです。神の真理を語り続けていく。願わくば私たちの愛する者たちが誰ひとりとしてこの救いから漏れることがないことを祈りながら。覚えなければいけないのは、我々の働きはこの神の救いのメッセージを伝え続けることです。

3) ユダヤ人の迫害と勝利

さて、この第2次宣教旅行によってパウロは確かにコリント教会を開拓し、この教会が誕生したのです。使徒18:11「パウロは、一年半ここに腰を据えて、彼らの間で神のことばを教え続けた。」とあります。その後12-13節を見ると「ところが、ガリオがアカヤの地方総督であったとき、ユダヤ人たちはこぞってパウロに反抗し、彼を法廷に引いて行って、『この人は、律法にそむいて神を拝むことを、人々に説き勧めています。』と訴えた。」、新しい地方総督がやって来たのです。名前もここに書かれています。このガリオという人物は恐らく紀元52年ぐらいにアカヤ州の地方総督に就任したのでしょう。ユダヤ人たちの賢さを見て取ることが出来ます。パウロがコリントの町で説教すること、福音宣教することをやめさせようと恐らく彼らはこれまでも何度か試みたはずですが、ところがかなわなかった。そして新しい地方総督が来たので、この人だったら大丈夫だろう、今だったら大丈夫だろうと言ってパウロを引いて法廷にやって来るのです。「この人は、律法にそむいて神を拝むことを、人々に説き勧めています」と。彼らが願っていたことはただ一つです。ガリオがパウロに対してこの町で福音宣教することは禁ずると命令してくれることを願っていました。

ところがおもしろい結果が伴います。14節に「パウロが口を開こうとすると、ガリオはユダヤ人に向かってこう言った。」、パウロが自分の弁明をする前に彼はそれを遮るのです。「『ユダヤ人の諸君。不正事件や悪質な犯罪のことであれば、私は当然、あなたがたの訴えを取り上げますが、」、つまり彼はこれは何の犯罪でもない、不正なことでもないと言ったのです。パウロのやっていることが正しいということを実証してみたいなものです。そして彼はよくわかっていたのです。15節「あなたがたの、ことばや名称や律法に関する問題であるなら、自分たちで始末をつけるのがよかろう。私はそのようなことの裁判官にはなりたくない。」と。ユダヤ人たちはありとあらゆる知恵を振り絞ってどうやったらこの町におけるパウロの宣教をやめさせることができるかを考えて、このような方策を考えたのです。ところが非常に驚かされるのは、結果は誰も彼の働きを邪魔することができなかったということです。10節で「だれもあなたを襲って、危害を加える者はない。」と神が言われました。何を言っているかということ、人間がどんなに知恵を振り絞って神のみこころに反することを企てたとしても、神のみこころは必ず成るといえることです。この方はその権利をお持ちなのです。神はご自分がお決めになったこと、ご自分が言われたことをそのとおり実行する権利をお持ちだし、その力をお持ちなのです。人間の愚かさが見て取れませんか？そしてそれ以上に神の御力を見ることはできませんか？神は言われたように、ちゃんとパウロを守られたのです。そしてパウロを通して主のみわざがなされました。確かに1年半、このコリントの町にあってパウロは神のことばを宣べ伝え続けたのです。だから私たちもどんなことを経験しようとすべてを司っておられる神を見上げるのです。この方にのみ信頼を置くことです。必ずこの方はみこころを

なされるのです。

3. コリント人への手紙第一

これが私たちがコリントを学んでいくための背景です。教会が誕生しました。そして間違いなくこの教会に宛ててコリント人への手紙は送られたのです。実際にみことばに入っていく前にもう一つだけ皆さんと一緒に見たいのは、パウロがどのような経緯をもってこの手紙を書くに至ったかです。それも私たちがコリントの手紙を学ぶためには、どうしても知っておきたい大切なところなので、もう少しだけ説明させてください。

この18：18を見ると「パウロは、なお長らく滞在してから、兄弟たちに別れを告げて、シリアへ向けて出帆した。」とあります。コリントでの働きを終えたパウロはこの後シリアへと戻っていきます。みことばには「ブリスキラとアクラも同行した。」とあります。彼らを連れてエペソという町に行きます。途中ケンクレヤに立ち寄ってその後エペソへと向かった様子が19節に書かれています。そしてパウロはそこで「自分だけ会堂には行って、ユダヤ人たちと論じた。」とあります。エペソの人たちはこう言います。パウロ、もっといてくれないかと。20-21節でもパウロはそれを「聞き入れないで、『神のみこころなら、またあなたがたのところに帰って来ます。』と言って別れを告げ、エペソから船出し」て、カイザリヤに着くのです。とてもすばらしい港で今も美しい港が残っています。このカイザリヤに上陸し、彼らはそこからエルサレムへと向かっていきます。そしてエルサレム教会であいさつをした後、その後アンテオケへ下っていくと書かれています。このアンテオケというのはトルコ南部の都市で、現在はアンタキヤと呼ばれています。この間ジャーナリストが解放されたニュースで、彼はこの町からシリアに入ろうとしたのです。このアンタキヤは聖書に出て来る宣教の中心となった町アンテオケで、今もその町が残っています。これがパウロの第2次宣教旅行の終わりでした。彼らはアンテオケに戻ったのです。

そして23節「そこにしばらくいてから、彼はまた出発しガラテヤの地方およびフルギヤを次々に巡って、すべての弟子たちをカづけた。」とあります。恐らく紀元53年ごろのことです。これが第3次宣教旅行の始まりでした。パウロたちはアンテオケを出てガラテヤ地方、つまり現在のトルコの大体真ん中あたりをずっと西へ向かって何カ月もかけて移動していきます。そして彼らがたどり着いたところがエペソという町だと記されています。19：1「アポロがコリントにいた間に、パウロは奥地を通過してエペソに来た。」と書かれています。そしてパウロはこのエペソの町を宣教の拠点とするのです。

さて、エペソの町にパウロがいた間に、コリントの情報をいろいろと聞きます。でも実際のところはコリント人への手紙を見ると、どうも彼がエペソに着く前に、どこかでパウロはコリントの教会に宛てて手紙を記したようです。1コリント5：9を見てください。「私は前にあなたがたに送った手紙で、」と書いてあります。つまり今我々が見ている1コリントよりも前にパウロがコリントの教会に手紙を送っていたことをここで見て取ることができます。そしてパウロはコリント教会のことをエペソの町にとどまっている時に聞いたと言いました。そのことが幾つか書かれています。一つ目は1コリント1：11に「実はあなたがたのことをクロエの家の者から知らされました。兄弟たち。あなたがたの間には争いがあるようで、」と書いてあります。エペソでパウロはクロエの家の者からコリント教会の現状を知らされるのです。二つ目は1コリント16：17で三人の人物がパウロのところを訪問した様子が書かれています。16：17に「ステパナとポルトナトとアカイコが来たので、私は喜んでいます。なぜなら、彼らは、あなたがたの足りない分を補ってくれたからです。」とあります。この三人がやって来て、パウロが知らなかったコリント教会の現状を知らせてくれたということです。ですからクロエの家の者からの知らせと、この三人の者が彼のところを訪問してコリント教会の実情を明らかにしたと。そして三つ目は1コリント7：1にこんなことが書かれています。「さて、あなたがたの手紙に書いてあったことについてですが、」、つまりコリント教会の実情をコリントから送られてきた手紙でパウロは知ったということです。ですからパウロは、このコリント教会からの訪問者、クロエの家の人とこの三人「ステパナとポルトナトとアカイコ」の訪問と教会から送られてきた手紙によってコリント教会の実情を知るのです。そこで、このコリント教会が抱えているさまざまな問題と質問にこたえるために書かれた手紙が今私たちが学ぼうとしている1コリントなのです。

4. コリント人への手紙第二

恐らくパウロはこの手紙をテモテに託したのだと思います。そのことが1コリント4：17に出てきます。「そのために、私はあなたがたのところへテモテを送りました。」、コリント教会の実情を聞き、そしてパウロは1コリントを書き、これをテモテに託して彼を送るのです。しかし、残念なことに、この手紙でも彼らが抱えていた問題を解決することにはならなかったのです。この教会の現状をテモテが知らせてくれるのです。この教会がどんな状態にあったかという、教会の中に偽りの教師たちが入り込み、彼らはパウロの使徒職についてやささまざまなことうそを教えるのです。そこで教会はパウロに対して、またみことばに対する信頼や忠誠心を失いかけていたのです。それを聞いたパウロはその後コリ

ントの町へ出かけていきます。これが二回目のパウロのコリント訪問になるのです。それが2コリント2：1に出てきます。「そこで私は、あなたがたを悲しませることになるような訪問は二度とくり返すまいと決心したのです。」とあります。1コリントを送って、それを届けたテモテ自身からコリント教会の現状を聞いたパウロはいたたまれなくなって、実際にコリントへと出かけていくのです。その訪問のことをパウロは2コリント2：1で「あなたがたを悲しませることになるような訪問は二度と」したくないと記しています。しかし、悲しい現実は、この訪問によっても実は解決を見出すことはできなかったのです。教会のにせ教師たちは公にパウロを非難するのです。しかもこの教会の大きな問題だったのは、このように罪を犯し、教会の秩序を乱している人々を教会は戒めることをしなかったのです。みことばが教えるように兄弟が罪を犯したら、教会はその罪を悔い改めるようにと、その悔い改めを勧めなければいけないのに残念ながらそれをしていなかったのです。パウロは大変な悲しみに満たされてコリントの町からエペソの町へと帰ってくるのです。

そしてパウロは新たな手紙を書きます。コリント教会のいろいろな情報をパウロのところを訪問した人々、また教会から送られてきた手紙によって知ったと最初に私が言いましたけれども、その前にパウロが書いた手紙、そしてパウロがコリントから戻ってきて、改めてエペソで書いたこの厳しい手紙は聖書の中には含まれていません。ここに書かれていない手紙をパウロは送っているのです。みことばがそのことを我々に教えてくれます。2コリント2：1では訪問の話がありましたが、4節は「私は大きな苦しみと心の嘆きから、涙ながらに、あなたがたに手紙を書きました。」と書かれています。パウロはエペソに戻った後、この教会に宛てて手紙を書いたのです。なぜ厳しい手紙かというと、この教会の罪を記したからです。恐らくこの厳しい手紙はテトスが持ってまたコリントへ行くのです。その手紙を送ったパウロはその結果を知りたいのです。そこで彼はトロアスの町に行きます。2コリント2：12-13にその様子が書かれています。「私が、キリストの福音のためにトロアスに行ったとき、主は私のために門を開いてくださいましたが、兄弟テトスに会えなかったので、心に安らぎがなく、そこの人々に別れを告げて、マケドニヤへ向か」ったと書かれています。パウロがトロアスの町に行った時に、パウロはここでテトスと会うはずだったのです。でもそこにテトスがいませんでした。そこでパウロはマケドニヤにもう一回行こうとするのです。彼が教えてくれるように「テトスに会えなかったので、心に安らぎが」なかったと。

なぜパウロがこんなことを言ったかということ、パウロはコリントの教会を愛していたのです。彼らが本当に罪を悔い改めて神の前を正しく歩むことを願っていた。それを願って彼は訪問し、彼は手紙を記したのです。ですからこの厳しい手紙を書いた後、テトスが持って来る知らせを心待ちにしていたのです。その様子が2コリント7：5-6に出てきます。「マケドニヤに着いたとき、私たちの身には少しの安らぎもなく、さまざまの苦しみに会って、外には戦い、うちには恐れがありました。しかし、気落ちした者を慰めてくださる神は、テトスが来たことによって、」、テトスが戻って来たのです。テトスと出会ったのです。「私たちを慰めてくださいました。」と。それだけがパウロの喜びだったかということ違います。7節「ただテトスが来たことばかりでなく、彼があなたがたから受けた慰めによっても、私たちは慰められたのです。あなたがたが私を慕っていること、嘆き悲しんでいること、また私に対して熱意を持っていてくれることを知らされて、私はますます喜びにあふれました。」、彼らのパウロに対する見方が全く変わったのです。パウロのことを愛しているということをパウロはテトスから知らされるのです。8-9節「あの手紙によってあなたがたを悲しませたけれども、私はそれを悔いていません。あの手紙がしばらくの間であったにしろあなたがたを悲しませたのを見て、悔いたけれども、今は喜んでいます。あなたがたが悲しんだからではなく、あなたがたが悲しんで悔い改めたからです。」と。だからパウロは喜んだのです。愛するコリントのみんなが悔い改めたのです。そのニュースを聞いた時にパウロは大いに喜ぶのです。

コリントの教会の多くの人たち、確かに若干名のユダヤ教徒たちが神に逆らい続けていたようですが、コリント教会の多くの者たちはパウロの使徒職について彼に対する反抗的な態度を悔い改めるのです。それを聞いたパウロは、このマケドニヤ、恐らくピリピからコリントの人々にまた手紙を送るのです。それがコリント第二の手紙です。そしてその手紙を送った後パウロは3度目の訪問をするのです。これがこのコリント第一、第二の手紙の背景の出来事です。こういうことがあって二つの手紙が記されていたのです。少なくとも私たちはこういうことを通して、パウロが牧師として、宣教師としてどんなに心を痛めていたのかがわかります。彼は主の導きを信じて最善をなしたけれども、願った結果が伴わなかった。パウロが証してくれたように彼の心も沈んでいたのです。でもだからといって彼は働きをやめるような人物ではなかった。神を信頼して働きをした時に、神はちゃんと慰めてくださり、そして彼を大いに祝してくださるのです。遂に、彼の祈りであったコリント教会の人々が悔い改めたのです。そして記されたコリント第二の手紙。

B. パウロの教え

1. 神を見上げなさい

今回私たちが学ぼうとしているコリント第一の手紙に戻って第1章から見ていくと、パウロはこのコリントの教会の人々に、いま一度彼らにいただいた神様の祝福を思い起こさせるのです。あなたたちに与えられたその祝福をしっかりと覚えなさい、忘れてはならないと。実はそこに私たちが直面するさまざまな問題の解決方法があります。確かに我々はいろいろなことで心を痛めたり悩んだりすることがあります。その中にあって、我々はずっとその状態にいることもできるし、その状態から勝利してくることもできるのです。パウロが当然望んだことは、このコリントの教会がその問題に勝利して、主の栄光を現す群れとなってほしいということでした。そこでパウロがしたことは、神を見上げなさい、神があなたたちのために、そしてあなたにどんなことをしてくれたのか、その恵みをしっかりと思い出すようにと繰り返し記しています。私たちも神が私に、あなたに与えてくださった祝福を忘れると、残念ながら私たちのうちからさまざまな不満がわき上がってきます。なぜかというと、主なる神以外のところを見るからです。そうすると人は、人と自分を比較してみたり、自分の祝福の理想と現実を比較するようになって来るのです。こんなはずではなかった、なぜ私ばかりこんな目に遭うのでしょうか、なぜこんな辛いことが続くのでしょうかと。そうすると不満や不平、怒りがいつの間にか私の心を満たすようになって行くのです。そして不満が募っていくと、私たちの心は怒りを抱きます。自分にそのような生活を強いる者に対して、こういう結果をもたらした者たちに対して、そして神に対して。もうその人の内側から感謝がなくなります。その人の内側から賛美がなくなっていきます。なぜかわかりますか？その選択が正しくないからです。

パウロはあなたがどんな祝福を既にいただいているのか思い出さなさいと言います。聖歌604番に「数えてみよ主の恵み」という曲があります。残念ながら、この日本語の歌詞はオリジナルの意味をそんなにうまく表していません。なぜならオリジナルにはこんな意味があります。

- 1 人生の大波であなたが困惑した時 あなたが落ち込み、絶望的に思える時
あなたの多くの祝福を数えてごらんなさい それらをひとつずつ言ってごらんなさい
主がなされた御わざがあなたを驚かせるから
- 3 あなたが人を彼らの所有する土地や富で見ると
キリストがあなたに約束されたキリストの甚大な富のことを考えなさい
金で買えないあなたの多くの祝福を数えなさい 天国でのあなたの報い 天国のあなたの住まいを
- 4 だから葛藤の中でそれがどのようなものでも落ち込んではいけません 神はすべてを支配しておられるから
あなたの多くの祝福を数えてみなさい 天使たちも同席してくれる
あなたの人生の終わりまで助けと慰めがあなたに与えられるのだ
<コーラス> あなたの祝福を数えてごらん それらをひとつずつ言ってごらん
あなたの祝福を数えてごらん 神がなされた御わざを見てごらん

神を見てごらんなさいと、同じことを言っています。もうあなたがどんな祝福を神様から約束されたのか、それを見てごらんなさいと。ひよっとしたら今のあなたにそれが必要かもしれない。

2. 信仰者が神からいただいた祝福

パウロはこの1コリント1:1-2aに「神のみこころによってキリスト・イエスの使徒として召されたパウロと、兄弟ソステネから、コリントにある神の教会へ。」と記しています。この手紙はあいさつから始まっています。この当時の手紙はみんなこうでした。まず差出人がだれなのか、そしてこの手紙の受取人はだれなのか。そのことを記した後であいさつが続いていくのです。そしてこのあいさつの後、もちろん最初からですが、先ほどからお話しているように、信仰者が神からいただいた祝福のことが繰り返し記されています。私たちはこの主なる神があなたに与えてくださった、信仰者すべてに与えてくださった、その恵み、その祝福をご一緒に見ていきます。

1) 主の恵み

まず最初、1節でパウロが言うことは、あなたに与えられた神様からの祝福は主の恵みだと言っています。恵みがあなたに与えられたということです。「神のみこころによってキリスト・イエスの使徒として召されたパウロ」と、自分のことをこう説明しています。パウロは、私が使徒としてこの務めについているのは私が何か特別な人間だからではなく、すべて神の恵みなのだと言っているのです。救いもそうだし、救った者を神がどうお用いになるか、それはすべて神のみこころなのです。私たちは神によってただ用いていただく道具にすぎない。ここにパウロ自身の傲慢さを見て取ることはできません。なぜならパウロは間違いなく自分自身がどれほど神の怒りにふさわしい存在であるかを誰よりも知っていたからです。ですから彼はこのような祝福にあずかったのはもうすべて神の恵みによると、そのことを感謝するのです。

◎使徒の条件

先ほどの学びの中でも見てきたように、当然教会の多くの者たちはパウロの使徒職というものに疑問を抱きました。しかし、パウロは間違いなく使徒としてふさわしい人物なのです。確かにあの十二使徒のところにパウロの名前は出てきません。でも使徒として召されるためには少なくとも三つの条件が必要でした。使徒として本物かどうかというのはこの三つにかかっていたのです。

① イエスの復活の目撃者

一つ目はその人物はイエス・キリストの復活の実際を目撃者かどうかです。実際に復活したイエス様を見たことがあるかどうかです。パウロはありました。十字架に架かってそこからよみがえる。それだけではなくパウロはダマスコに行ってより多くのクリスチャンを苦しめようとしていた時にイエス・キリストに出会います。使徒9：4-5で「『サウロ、サウロ。なぜわたしを迫害するのか。』という声を聞いた。彼が、『主よ。あなたはどなたですか。』と言うと、お答えがあった。『わたしは、あなたが迫害しているイエスである。』と。ダマスコに行く途上で彼は復活の主に出会っているのです。

② 奇跡を行う

二つ目は使徒はいろいろな奇跡を行ったのです。なぜかという、その当時、初代教会において聖書のみことばは完成していませんでした。だからこの人たちが神のメッセージを語った時にそれを証明する印が必要だったのです。それが奇跡だったのです。使徒19：11が言うように、「神はパウロの手によって驚くべき奇蹟を行なわれた。」と。パウロを通して奇跡をたくさん行っているのです。

③ 教会の土台を据える

三つ目に言えるのは、使徒というのは教会の土台を据えるという務めがありました。教会の土台というのは建物の話ではありません。信仰者が救いにあずかること、そしてイエス様を信じた人はその信仰の土台にイエス様を据えているのです。その働きをパウロがしたのは言うまでもありません。このコリントの教会もしかり。パウロはさまざまところで人々に伝道し、彼らはイエス・キリストという土台を据えたのです。そういう働きをしてきたのです。ですからパウロは確かに使徒としての条件にかなった人物です。

でもパウロは言うのです。だから私は自分から推薦して使徒になったのではない。これはすべて神の恵みなのだと。主がパウロを選び、パウロを召されたと。1テモテ1：12-13でパウロはこう言っています。「私は、私を強くしてくださる私たちの主キリスト・イエスに感謝をささげています。なぜなら、キリストは、私をこの務めに任命して、私を忠実な者と認めてくださったからです。私は以前は、神をけがす者、迫害する者、暴力をふるう者でした。それでも、信じていないときに知らないでしたことなので、あわれみを受けたのです。」。ですからパウロはこのような、私は神の恵みによって召されたのだということをお口にしながら、間違いなくこの救いにあずかったことも含めてすべては神の恵みなのだと。神が私のような者に下さったもったいない賜物なのだ、ギフトなのだと確信していた。あなたもそうではないですか？なぜこんな者を神が救ってくださったのか、なぜこんな者を神の栄光のために用いてくれるのか。すべて神の恵みなのです。ですからまず、自分自身ことについてもパウロは、私はこのように救いにあずかり、そして私を神は人として召してくださいました。これはすべて神の恵みなのだということを彼は忘れていなかった。我々も神様からいただいたこの神の恵みに感謝することです。

◎兄弟ソステネ

最後にもうひとりだけ不思議な人物の名前がその後に出てきます。「兄弟ソステネ」です。これは一体だれなのか、実際にこの人の名前が出てくるのは使徒18：17でした。先ほど私たちが見たようにユダヤ人が訴え出したことに対してガリオが彼らの訴えを却下した時に、この人々が何をしたかという、「そこで、みなの方は、会堂管理者ソステネを捕え、法廷の前で打ちたたいた。ガリオは、そのようなことは少しも気にしなかった。」と書いてあります。この名前が出ています。なぜこんなことが起こったのかという、考えられるのはこういうことです。ユダヤ人たちは結託して何とかパウロが宣教をやめるようにと働きましたが門前払いです。ガリオは考えることもなく訴えを却下したのです。そこでおまえがもっとうまくやっていたら、この願いを受け入れてくれたかもしれない、恐らくそういう思いを持って彼らはこの会堂管理者ソステネを責めたのです。

でもこの同じ人物が1コリント1：1にはパウロによって「兄弟」と書かれています。つまりこの人物は救われていたのです。この法廷の前で打たれた時に救われていたのかはわかりません。その後には救われたのかもしれませんが。でも神は彼を救ってくださって、このように名前が列記されているというのは恐らくパウロのメッセージをこのソステネが書記として記したのでしょう。いずれにしろパウロにとって非常に重要な働き人だったのです。すごいと思いませんか？このような町です。ユダヤ人はみんな挙ってパウロを迫害したのです。ユダヤ人たちは多くの者たちがこの福音に対して心をとざし、神に逆らったのです。でも神は確かに救われる人を起こしてくださいました。この会堂管理者が救われるのです。恐らくこのソステネというのは使徒18：8に出てきた会堂管理者クリスポの後任でしょう。神はこの人

物にもこのように働いて救いを与えてくださった。神の恵みでもって彼も救いにあずかった。

こうして神の御わざを見ていると希望がわいてきませんか？神がどんなことをなしてくださるのか、神は私たちの願いごとを聞く必要がありません。そんな責任も神にはありません。でも神は必ずご自身のみこころをなしてくださる。我々は神がどんな方か、そのことを知っている者たちです。愛とあわれみにあふれた方です。どんな罪人でも神の前に赦しを求めれば赦してくださる方です。そのあわれみに私たちは期待できます。私たちの愛する者たちがこの救いにあずかることを。あなたの務めははっきりしています。神の恵みをしっかり覚えて、神があなたに与えてくださった働きを忠実にやり続けることです。それが我々の務めです。そして期待しましょう。神がどんな御わざをあなたを通してなして下さるのか——。すばらしい神であることは間違いない。この方に仕えること、この方のすばらしさを語るというのは我々救われた者に与えられた特権です。喜びを持ってこの働きをしっかりと生きていきましょう。